

クロソイ放流技術開発事業 (要 約)

泉田 哲志・中西 廣義・塩垣 優

本事業は餌料系列の単純化・選別手法・配合への早期餌付け等種苗量産技術の確立および網生簀による中間育成方法の確立等を目的に平成2年度より実施しており、3cm種苗12万尾の生産を目標としている。なお、詳細は「平成4年度放流技術開発事業報告書・クロソイ班」（平成5年3月、水産庁）として報告した。

結 果 の 概 要

1. 種 苗 生 産

5月8日から5月14日のうちの4日間に産出した仔魚950,000尾を用い、4回次の生産を行った。飼育日数は35～40日間で、435,000尾、平均全長23.8～27.7mmを生産した。平均生残率は55.5%（範囲30.9～94.7%）であった。

餌料はワムシ、アルテミア、魚卵（ヒラメ）、配合飼料を使用した。

配合飼料への早期餌付けとして、日令10日すぎ（平均全長10.5mm位）から微粒子配合飼料（粒径400 μ m）の給餌を開始し、ほぼ20日令（12.8mm位）で餌付けができた。

2. 中 間 育 成

（北金ヶ沢）

7月8日に平均全長35.8mmの稚魚105,000尾を北金ヶ沢漁港内網生簀に収容し、64～73日間中間育成を行い、平均全長82.5mmの稚魚76,450尾を生産した。この生残率は72.9%であった。放流後の初期減耗、移動、分散を把握するため全数右腹鰭抜去の標識を施し、9月9日、9月18日に北金ヶ沢地先に放流した。

（脇野沢）

7月14日に平均全長48.2mmの稚魚150,000尾を脇野沢海釣り公園前網生簀に収容し、63～78日間中間育成を行い、平均全長84.0mmの稚魚97,031尾を生産した。この間の生残率は64.7%であった。放流後の初期減耗、移動、分散を把握するための標識放流調査のため67,031尾は左腹鰭抜去の標識を施し、9月14日に牛の首に放流、30,000尾は尾鰭上葉カットの標識を施して9月30日に脇野沢地先に放流した。

北金ヶ沢、脇野沢ともに成長率、生残率は昨年と大差はなかったが、今後、魚体サイズの均一化に向けての技術検討が課題として残された。